

といううわさが流れたりしました。兼載は、

「そんなうわさがあるなら、わたしの句をぜんぶ除いてくれ。」

と言つて、歌集の完成があやぶまれたこともありました。若くて気持ちのはげしい兼載が、先輩の宗祇になだめられながら、ようやく新撰菟玖波集の完成にこぎつけたのでした。

この年、九月十八日、この歌集を作るのに後援してくれた大内政弘が病気でなくなりました。政弘の病気を聞いて、兼載は山口まで見舞いに行きました。ほぼ完成した新撰菟玖波集を手にして、政弘はどんなに喜んだことでしょう。画の天才の雪舟を育て、山口の大内文化を作った政弘の最後にふさわしい贈り物となつたのです。新撰菟玖波集には、政弘の連歌が七十五句のせられています。

兼載は、政弘の死の前後のことや、政弘の霊をなぐさめる句などをあわせて